

地域生活を支える
社会福祉法人
第260回

社会福祉法人 穩寿会 [千葉県千葉市] の試み



介護の「一つ手前」の支援 認知症とともに安心して暮らせる 高齢者の地域生活を支える取組

施設入所者と地域の在宅高齢者とが交流する認知症カフェ、家庭的な献立と提供方法が特徴の配食サービス、他事業所との差別化にもつながった高齢者向けの学習療法 (KUMON)、保育園で行う育児相談など、ニーズに応えた地域のための取組が、施設を知ってもらうきっかけとなっている。

穩寿会

<p>法人名 社会福祉法人 穩寿会</p> <p>本部住所 千葉市緑区高田町1084</p> <p>URL https://onjukai.com/</p> <p>理事長 武村 潤一</p>	<p>事業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 特別養護老人ホーム ● 短期入所 (ショートステイ) ● 通所介護 (デイサービス) ● 居宅介護支援センター ● ケアハウス ● グループホーム ● 小規模多機能ホーム ● 配食サービス ● 地域包括支援センター ● 保育園 	
--	---	--



特養やケアハウス、保育園が一つの地域に集まり、ニーズをくみ取りながら地域の福祉を支えている。



四季折々の花や日差しを感じられる敷地内は、近隣の方がたの気持ちのよい散歩コースになっている。

社会福祉法人 穩寿会の沿革

昭和の終わり、精神科医として多くの高齢者を診ていた初代理事長は、認知症患者への社会的理解の不足を憂慮していた。自らの理想を体現する認知症ケア施設として、昭和62年に特別養護老人ホーム「裕和園」を開設。当時、有料老人ホームはあったものの、認知症を専門とする特別養護老人ホームは珍しいものだった。

ショートステイ、デイサービス、居宅介護支援と事業を拡大し、2001年にはケアハウス「グリーンユウワ」を開設。2005年にははじめたグループホーム「かえで」は現在、小規模多機能型居宅介護も行う。2010年には認定保育ルーム「さくらんぼ保育園」を開所し、後に認可保育園とした。

勝浦市の「勝浦裕和園」を除き、事業所は千葉市緑区に集約している。初代理事長の「社会福祉施設は地域から隔絶されたものになってはいけない」という考えから、法人敷地には塀や門はなく、

近隣の人びとの散歩コースとなっていて、法人は身近な存在であり、地域の方がたとの交流や貢献活動は当たり前のこととして職員に浸透している。

現在は保育事業も行うが、認知症の高齢者が安心して過ごせる場所という原点はいつも強く意識している。目標とするのは、一人ひとりの残存機能に応じた支援。できることは見守り、ご利用者が誇りや自信をもって暮らせることを大切にしている。

職員の主体性を尊重する法人文化があり、地域貢献活動は職員からの提案も多い。現場から出てくるアイデアは期待以上のもので、理事長はサポート役に徹することができているという。トップダウンではない現場主義は、職員とのやりがいにもつながっている。

社会福祉法人 穩寿会の理念と方針

【理念】
「最良の心がけとより質の高いサービスの提供」

「より質の高い」という言葉には、常に自分たちのサービスに満足せず、レベルを上げていこうという思いが込められている。向上心の先にご利用者の安心や満足があり、それが法人の価値を高めると考える。

穩寿会のロゴマークは木と情報発信をモチーフにしたもの。法人を利用する皆さんには、できるだけ自然の中で過ごして欲しいという想いから生まれた。四季を通して木や草花を楽しむことができ、穏やかに心が休まる環境づくりを大事にしている。



コミュニケーションロボットを導入し、介護予防体操やレクリエーションに活用。よりよい支援方法の情報収集にアンテナを張っている。

穩寿会
の試み

Case 1

支援する側、される側の
垣根を超える
「オレンジカフェ」



穩寿会のオレンジカフェはいつも大にぎわい。地域の方がたが集い、いきいきと体操を楽しんでいる。

豊かな自然と、大規模開発のニュータウンが同居する千葉市緑区。早くから市街化が進んだ高田エリアは、初期の住人の多くが後期高齢者となっている。穩寿会では12年ほど前から、認知症の当事者と家族のための居場所づくりをねらいとして「オレンジカフェ」を実施。初代理事長が管むクリニックに通院する人が、帰りに立ち寄ってくつろげる場所を、という思いが出発点だった。

昨年、ケアハウス「グリーンユーワ」に会場を移し、参加者は毎回20名ほど。毎月第1・第3・第5土曜日に開催し、参加費は1回100円。70代から90代までの近隣住民と、ケアハウスのご利用者がともに午後の2時間を過ごす。

活動内容はおしゃべりやゲーム、手芸、折り紙、ポッチャなどで、みな時間が忘れて楽しんでいる。とくに、ボランティアのアンサンブル演奏に合わせた合唱が人気で、誰からともなく自然と歌がはじまることもある。毎回来

場全体に活気ある会話と笑顔があふれ、参加者だけでなく、活動をサポートする職員、ボランティアも開催日を楽しみにしている。

ケアハウスに興味をもった地域住民に入所者が自室を見せたり、連れ立ってお茶に出かけたりと、自発的に交流が生まれていることも地域の支え合いにつながっている。

職員にとっても得るものが多い。認知症が進行している方がたが、それを感じさせないほどはつらつと活動に参加している姿は、それぞれの方への適切な支援をあらためて考えるきっかけになったという。

運営はボランティアが主体的にかかわっている。千葉市主催の「認知症サポーターステップアップ講座」修了生を中心に、毎回4～5名が参加。主体的な運営は自然に発生したもので、自分たちがどれだけ地域に支えられているかを職員が再確認する機会にもなっている。

課題は、遠方からの参加希望に十分に答えられていない点。送迎を申し出てくれるボランティアもいるが、ボランティア自身の高齢化が進んでいることから事業としての継続性を考えると簡単ではない。好評でうれしい反面、限られたエリアからしか参加できないことには歯がゆさもある。無理のない形で最適な実施方法を模索し、地域にあるニーズに応じていくことを目標としている。



おしゃべりを楽しみながら手先を動かし、色とりどりの飾りづくり。多彩な活動を楽しめるのが、オレンジカフェの魅力だ。

穩寿会
の試み

Case 2

学習療法（KUMON）が
ご利用者、家族、職員に
もたらした変化



学習療法の資格をとった職員が、ていねいにご利用者と向き合う。個々の認知機能の段階に合わせた取組。

通いと訪問、宿泊を組み合わせた小規模多機能型居宅介護では、職員の業務は多岐にわたる。「小規模多機能ホームかえで」では、外勤と内勤の職員がせわしなく行き交うなか、ご利用者が一人で座っている時間が課題となっていた。もっとご利用者と向き合える、核となる活動はないかと考えていたところ、KUMONの学習療法に出会った。

学習療法実践士などの資格を得た職員が約30分間、1対1または1対2でご利用者と向き合う。読み書き、計算、数字盤を使った手作業などで、認知機能の維持・改善を図る。例文の童謡から回想法につなげるなど、教材には高齢者向けの工夫がなされている。

取組後には明らかな成果が見られた。参加者の約6割で認知症の長谷川式認知症スケールの点数が向上、施設や自宅で転倒する人の減少も認められた。注意力が回復した結果と考えられている。

職員とコミュニケーションをとりながら、声を出したり手を動かしたりする学習療法にはほかにも効果がある。食事を残しがちだったあるご利用者は、学習に取り組むうちに空腹感を自覚するようになり昼食を完食できるようになった。また、学習療法開始時の契約書に自分で記名ができず、家族も諦めていたご利用者が、2か月後には「名前を書けるようになった」とご家族が涙ながらに報告してくれたこともあった。

運営が難しいとされる小規模多機能型居宅介護だが、「かえで」は常時数名の待機者を抱えている。学習療法を通じて一人ひとりのご利用者としっとり向き合う時間は、職員にとってもかけがえのないものになっている。その様子を担当者は「合わせ鏡」と表現する。一方の好感情が、もう一方にも伝わるという意味だ。認知症があっても「できた」という体験の積み重ねは、ご利用者だけでなく家族や職員をも前向きにする。父母に笑顔が戻った、

医師から症状改善を告げられたなど、確かな効果が得られている。

大きな成果を上げている事業だが、課題は人員の確保だ。しかし、認知機能の改善により一日でも長く住み慣れた自宅で自立して生活できることには、計り知れない価値がある。ショートステイやデイサービスなど、法人全体で学習療法に取り組む方法を模索している。



天気の良い日には、気分転換も兼ねて屋外で学習療法を行う。ご利用者が支払うのは公文のテキスト代月2000円のみ。



学習療法の取組を先導する古賀寛之センター長と野口哲也事業課長（作業療法士）。「かえで」以外のサービスへの展開も進めている。

穩寿会
の試み

Case 3

法人施設と同じ献立で 温かい食事が届く 「ぬくもり配食サービス」



ぬくもり配食サービスを支えるのが、配食ボランティアの存在。利用している高齢者は会話も楽しみにしていて、温かな食事とともに、安心感も届けている。

ケアハウス「グリーンユウワ」の特徴的な取組に65歳以上の在宅高齢者を対象とした昼食宅配サービス「ぬくもり配食サービス」がある。現在は月曜日から金曜日まで1日6食程度、料金は1食700円、月に100食ほど提供している。

平成13年に千葉市からの委託事業としてスタートしたものが、平成26年度末をもって事業廃止が決定。多くの事業所が撤退するなか、穩寿会では利用していた方がたの切実な声が後押しとなり、地域貢献事業として継続を決めた。

使い捨て容器や弁当箱ではなく、大きな保温ケースに皿や茶碗を入れて届ける。献立はグリーンユウワの昼食とまったく同じで、温かい汁物もつく。家庭的な盛り付けが好評だ。

配達を手伝うボランティアの存在も大きい。昼食を届けるうちにちょっとした困りごとを耳にし、ボランティアが前職の知識を活かして利用者宅の修繕をしたことも

あった。配達は安否確認も兼ねており、訪問先で救急搬送を要する事態に遭遇したこともある。

ボランティアが快く協力してくれる背景には、グリーンユウワの開放的な雰囲気がある。配達から戻ったら「おかえりなさい」と迎え入れ、昼食時にはボランティアも当日の配食メニューを食べている。同じ食事をしているからこそ、自信をもって配達することができているという。職員とボランティアとのあいだには、ともに活動する仲間という意識が共有できている。

しかし、現実的な課題としては、ボランティアの方がたを長期的に安定して確保するのは難しい。食材費や光熱費が高騰するなか、事業予算のやりくりも簡単ではない。しかし、介護サービス利用の手前の段階にある地域住民に元気を届け、食事を通して施設の存在を伝えることができ、潜在的ニーズを把握できることは大きな価値があると考えている。今後は

配食サービスをきっかけにオレンジカフェを知ってもらうなど、複数の事業を結びつけることをめざしている。



ある日の献立。見た目もきれいなお弁当。上記の写真のドライバーが手に持っているのが保温式の弁当箱。



栄養士が栄養バランスや季節の食材にもこだわり、グリーンユウワの調理スタッフが手づくりしている栄養満点の昼食。

穩寿会
の試み

Case 4

在宅で育児をする人を 孤立させない子育て支援 活動範囲を広げるきっかけづくり



育児相談とふれあい広場の案内は、さくらんぼ保育園の入口に掲示。子育ての悩みはさまざま。気軽に立ち寄りもらえる場づくりをめざしている。

新しい分譲地には子育て世代も住む。法人のすぐ裏手に大きな団地ができたが、外で遊ぶ子どもが少ないことを案じたさくらんぼ保育園では、在宅で育児をする人に向けた取組を行っている。

「ふれあい広場」は、園の入口横にある敷地の一部を、地域の子どものための遊び場として開放する取組。何度か通ううちに園に向けた取組を行っている。子どもたちのための遊び場として開放する取組。何度か通ううちに園に慣れた子どもたちは、自然に職員とあいさつを交わすなど家族以外の人と接する場面も増え、保護者が子どもの成長を実感する機会にもなっている。この「ふれあい広場」をきっかけにあまり外にでることのなかった親子が、地域の公園にも足を伸ばすようになるなど、行動範囲が広がるきっかけづくりにもなっている。

また、月2回、予約制で行う育児相談では、食事や寝かしつけなどの悩みを個別に聞きアドバイスをしている。児童館など多くの親子がいる場面では気後れる人も、保育園の一角なら話しやすい。相

談のあいだ、子どもが保育室に興味をもつ姿を見て、保育園の利用を考えはじめ保護者もいる。

課題は、どこまで踏み込めるか。ときには悩みが寄せられるなかで、解決にいたる前に来なくなりコミュニケーションが途切れることもある。また、困りごとがあっても相談に来ない潜在的な要支援者もいるはずで、そういった親子にどうアプローチするか、担当者間ではたびたび話題が上がっている。

現在は、これらの活動をもっと広げていくために、以前から続けている高齢者施設との交流を積極的に行っていくこと、さらに、近隣の保育園と連携した活動ができないかを検討している。

それぞれの事業所が個別に行っている取組を結びつけ、さらなる取組にしていくことは、穩寿会全体の目標でもある。

「地域との取組をもう一段階発展させたいと考えています。例えば、学習療法のようなものを、もっと気軽なものとしてオレンジ

カフェでも実施ができれば、多くの方にとってメリットがありますし、法人の取組をより知っていただく機会にもなります。それぞれの取組を単体活動として終わらせるのではなく、つなぐことで広がりを生み出したいと考えています」(武村潤一理事長)。



園庭は「ふれあい広場」として地域の方がたに開放。子どもたちがのびのびと遊ぶ姿に、保護者の心もほぐれていく。



日頃の支援や研修、そして地域のための取組について職員同士が活発に意見交換。こうした日々の積み重ねが、穩寿会の前進を支えている。